

神奈川県立生命の星・地球博物館

友の会通信

Vol. 12, No.3, 通巻 62 号 2008.12.15 発行

目次

活動報告	1~5	博物館NOW	8
わたしの選ぶ“この一冊”	6	情報クリップ	8
私の応援メッセージ	7	行事案内	9・10

活動報告

子ども自然科学ひろば

「いろいろ体験」

8月16日(土)／博物館実習実験室／40名(スタッフ9名)

①プランクトン観察

講師：小田部家邦(プランクトンウォッチャー)

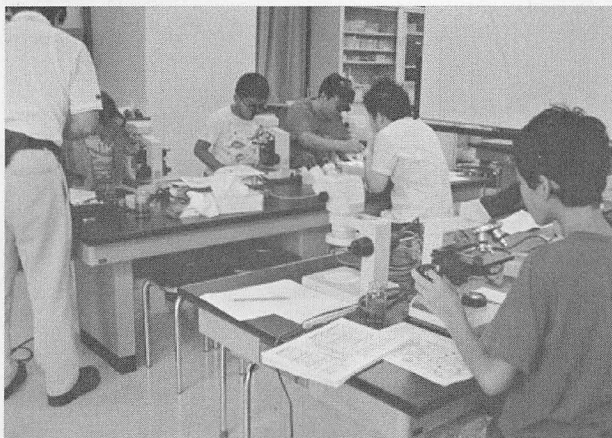
②変形菌を探そう

③葉っぱでスタンプ

昨年と同様、事前申込み制とせず、毎回受付で3講座を4回(葉っぱでスタンプは3回)延べ11講座を実施しました。保護者を含めると約50名の参加があり、毎回人気の「プランクトン観察」では、一生懸命にプランクトンを描いていました。

今回初めて実施の「変形菌を探そう」では初めて見る変形菌に感動したり、「ムラサキホコリ」や「ウツボホコリ」のフィギュアづくりを楽しみました。

「葉っぱでスタンプ」では自分の出来栄えにびっくりしている子ども達が印象的でした。この講座は旧オープンラボのメンバーを中心に菌類ボランティアとネコの手隊3名のスタッフ協力により実施できました。(矢野清志)



真剣にプランクトン観察

子ども自然科学ひろば

「道ばたの雑草観察会」

8月24日(日)／博物館実習実験室／10名 見学者5名／講師：勝山輝男学芸員

土砂降りの雨の中で参加者が採取して来た植物と生きた図鑑(主催者が当日の朝に採集して展示して置いた30数種の植物)と比較して、植物名・科・植物の特徴を学び、その後参加者が採取して来た好きな植物で葉脈スタンプや葉を作りました。

- 身近な雑草でも、葉のつき方、茎の形など知らない点、ふだん気がつかない点がたくさんあることに気づきました。雑草を深くみることで色々な発見があり観察することの楽しさを知りました。参加人数と説明してくださるスタッフの数のバランスもよかったと思いますし、1人1人のスタッフの方がみなさん丁寧に子どもも大変喜んでおりました。よい企画です。ありがとうございました。(守谷としあき君〈小4〉の父)
- 葉脈スタンプのしおり作りが楽しかった。いろいろな模様のしおりが作れました。(溝口きらら〈小4〉)
- 植物の仕組みがよくわかりました。宿題の手助けになりました。(溝口りりか〈中1〉)

参加者は少なかったですが、上記の感想文のとおり、参加者の方には楽しんで戴きました。(土屋昌利)



この植物の茎はどうなっているの？

「魚の細密画を描こう」

8月30・31日（土・日）／博物館実習実験室／
5名／講師：瀬能宏学芸員

昨年度に引き続き2回目の講座になります。今回は、新潟県山古志村産の錦鯉を題材にとりあげました。

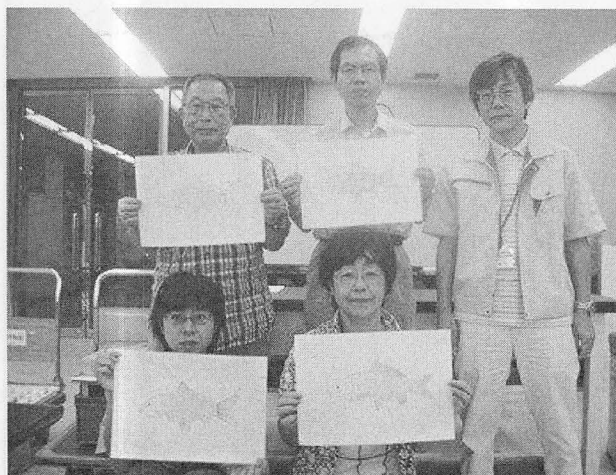
この講座は、とにかく作品として仕上げるため、集中力と限られた時間との勝負が必要となります。前回の経験から、時間のかかる下準備と計測の迅速化をはかるため、今回は、魚類ボランティアの皆さんが撮影した標本用の写真を利用して、なるべく手間をはぶいた下絵の完成を目指しました。

1日目には、魚の体の構造についての説明を受けながら、輪郭と鱗の下絵を、2日目には鰭の下絵と墨入れを行いました。

2日間に亘る講座は、参加者にとっては時間的に大変だったかもしれませんが、すっかりうち解けた雰囲気の中で静かに作業を進めることができました。

こつを得ることができ、もう一枚リベンジをしますという方、完成させる事ができなかったのが後日もう一度足を運ばせて欲しいという方、これを機会に眼鏡を新調して少しでもきれいな作品にしていこうというように、さらなる作品完成への情熱が盛り上がりました。

途中、入口に掲げた講座の紹介を見て、見学をなさっていった方も多数おりました。（星野和子）



下絵に墨入れをして完成です

第82回

サロン・ド・小田原

「新モデル箱根火山地質模型ができるまで」

8月30日（土）／博物館講義室・レストランフォーレ／講演会41名 交流会32名／講師：地学ボランティア、笠間学芸員

特別展「箱根火山」にあわせてのサロン、展示製作に携わった地学ボランティアの皆さんと笠間学芸員から「箱根火山地形地質模型の製作」と「箱根火山新モデルの概説」の話題提供をいただきました。その製作期間は1年8か月におよびました。幾度も修正を加えながら、立体地質図が完成に。地学ボランティアの皆さんからは、実際に作業をした人でないとわからない言葉が数々示されました。その一つが、平面の地質図ではよくわからなかった地質の上下関係が、立体地質図を作ることで自然と見えてきたということでした。箱根地形模型の製作、ほんとうにおつかれさまでした。

第二部の交流会では、軽食を囲みながら、箱根に関連した話題を楽しむ時間となりました。登場した箱根メニューは、“箱根とうふ”“カルデラハヤシ（これはレストランフォーレの限定メニュー）”“箱根軽石お菓子”など。また、箱根火山地質模型の色塗り材料、OHPシートを重ねてつくる箱根の立体地形の紹介等。参加者のお一人が水晶を持ってこられて、にわか標本会という場面も。最後には、特別展団扇のプレゼントもあり、盛況な会となりました。（関口康弘）



好評だった手作り箱根軽石お菓子

「三浦半島の付加体観察会」

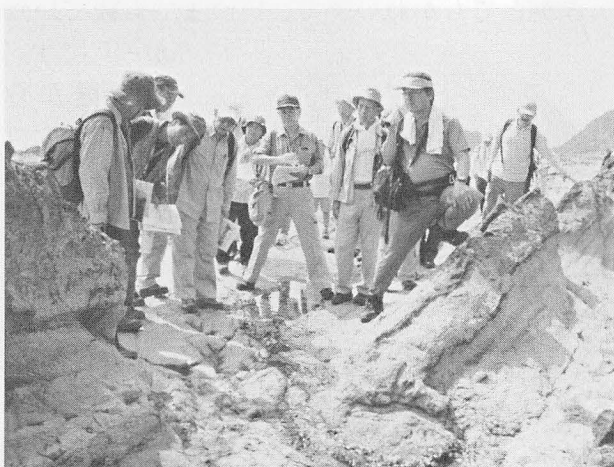
9月13日(土) / 三浦半島「毘沙門天下」海岸 / 28名(大人27名、子供1名) / 講師：蛭子貞二(友の会)、石浜佐栄子学芸員

ぼくは暑くてすぐにつかれてしまいました。お話はむずかしかったけれど、ああいう岩場は初めて見ました。ぼくがわかったことは、海のプレートにのったゴミみたいなものが陸にくっついたのが付加体だということです。付加体はチャート、火山灰、石灰石などだそうです。それから600万年くらい前の生きものが通ったあとの化石を教えてくださいました。ぼくが見つけたオオヘビ貝の化石(?)は、数年前の物だと言われました。

(揖斐諒太〈小4〉)

地質構造の観察をしながらお話を伺い、午後は地層の追っかけ(断層等で複雑に切られた地層がどう繋がっているかを調べる)も行われました。普段は何気なく見ている海岸地形が、地質変動の賜物だという思いになり、地球の営みに畏敬の念を感じずにはいられませんでした。最後に石浜学芸員による地層の走向、傾斜の調べ方を教わり、観察会の日が終わりました。9月半ばというのに夏のような日差しの中、皆さん熱心に勉強していらっしゃいました。それにしても蛭子講師のなんと素早い動き!、さすがフィールドワークで鍛えていらっしゃる方は違う、と脱帽でした。

(揖斐珠理)



皆で地層の“追っかけ”しています

第41回植物観察会

「秋草を楽しむ」

10月8日(水) / 石仏の道熱海コース / 34名 / 講師：勝山輝男学芸員

石仏の道を歩き始めるとすぐ、ノダケが沢山あり、ナンバンギセル、オオハナワラビ、タイアザミ、ヤマハッカが見られました。だいぶ登り草が刈られた足元にこれがヒガンバナ科と思う1センチ程の小さい黄色い花コキンバイザサを這うようにして見ました。花びらの先に長毛があるとルーペで見ると納得。イズコゴメグサはイネ科植物に半寄生し、箱根伊豆にあるとのこと。高級和紙の材料となるサクラガンピのサクラの様な樹皮を見ました。海岸の岩場や草地にあり丈が低く葉が厚いソナレマツムシソウ、でもマツムシソウは私の中では高原のイメージです。

振り向くと、真近に初島、海が綺麗に望められた。眺めの良い所で昼食。昼食後は樹皮の白いタンナサワフタギ、赤い実のアオハダ、この山の主というタブ、導管を持たず仮導管だけで水分を運ぶ1属1種、生きた化石と言われるヤマグルマを見ました。スダジイ、タブ等照葉樹林とブナが標高700mの地で共存するのは珍しい。それはブナが霧がかかり、風通しが良いことで夏の暑さを過ごせ、タブは冬の寒さに耐えられるためだと説明がありました。薄日もさす時もあり、楽しい観察会でした。

(原田久美子)



十国峠：ほら、ここにも、足元の花も楽しむ参加者

第41回植物観察会

「おもしろ発見講座イネ科ワールド」

10月30日(木) / 博物館実習実験室 / 31人 /
講師：友の会植物グループ

今日は教わろうと思ってこられた方ははずれ、面白い事があるかなと来られた方は正解。世界にイネ科は約10,000種、食料にしているものが多い。イネ科の特徴は、

- ①単子葉植物で葉の脈が平行
- ②多くのものは茎が中空で節がある
- ③根はひげ根
- ④花はたくさん咲くが花卉がない
- ⑤風媒花
- ⑥実が多く、デンプンを蓄えている

ウン、なるほど。それから机の上に山のように積まれたイネ科植物の花を実体顕微鏡で見えていった。各テーブルに2人ずつ、詳しい方がさらに事細かに案内してくれる。午後からはエノコログサの仲間の観察。一つの実がしっかり包まれているものはエノコログサ、ちょっと実の上の方があいて、野にあるときは頭を下げているのはアキノエノコログサ、半分くらい実が見えているはキンエノコログサ、実に分かりやすい。その間にお忙しい勝山先生のお話があった。イネ科の分類はキク科やハギの仲間に比べるとやさしいという。これを聞いて、イネ科への親しみが増えた。参加者の感想は、「面白発見講座、総て面白かった」「随分色々な事を学べてよかった」。(山田隆彦)



顕微鏡をつかってイネ科植物をみる

大人のための自然不思議発見講座

「クマムシの不思議」

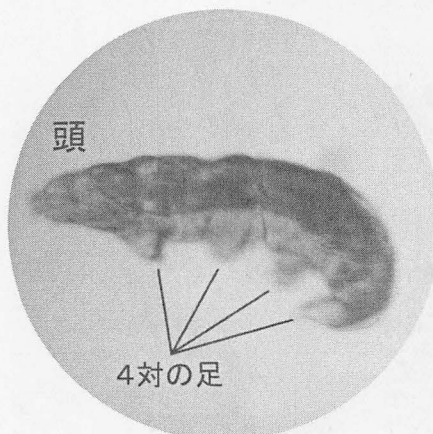
11月1日(土) / 博物館実習実験室 / 20名(スタッフ4名) / 講師：鈴木 忠(慶應大学医学部専任講師)

不思議な生き物「クマムシ」を通して自然を考えようという講座でした。休眠状態のたる型になると高温・高圧にも耐え、電子レンジでチンしても大丈夫? 宇宙船に乗って宇宙にも行ってきたクマムシ。そんなクマムシが意外と身近な所にいるのです。

鈴木先生のカムムシについてのお話の後、参加者は実体顕微鏡で、水につけたコケの中からカムムシを夢中で探しました。参加者各自が持ち寄った自宅近くのコケ、博物館横のコケから次々とカムムシが見つかり、あちこちで「かわいい!」と歓声があがりました。当日見つかったのは、オニカムムシほか数種、砂の間を4対の足でもごもご動いていました。(矢野倫子)

<参加者の感想>

- ・初めて見た。動きがおもしろい。生物っておもしろい。
- ・今日のお話を孫たちに伝えます。
- ・カムムシの映像を大きな画像でみて、胴部分の足の動きが何とも愛らしかった。
- ・新しい世界がひろがりました。
- ・身近なところにこんな不思議な生き物がいるということを知ると生きることが楽しくなります。
- ・カムムシの存在をはじめて知りました。顔と動きがとてもかわいくて、いつまでも観ていたかったです。



家の庭からとってきたコケから出てきてうれしかったです。一緒に暮らしていたのね。

見つかったカムムシ～可愛い～ 実物は0.5ミリです

第83回

サロン・ド・小田原

「スゲ属植物の魅力」

11月1日(土)／講義室・レストランフォーレ／講演会
59名 交流会38名／講師：勝山輝男学芸員

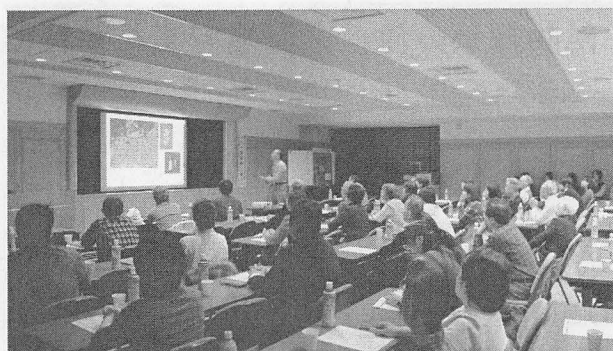
第一部の話題提供は学芸員の勝山さんからの「スゲ属植物の魅力」の講演。つづいて第二部の交流会は美味しい料理を囲みながら“スゲビンゴ”が登場する等々、楽しい会となりました。

スゲ属、日本には250種をこえるスゲが知られています。1属にこれほど多種が存在することは驚きです。それだけ似通ったスゲが多くなり、分類も難しくなります。そのため、いまでも新種の発表が相次ぐことも分類研究者にとっては大きな魅力となるのでしょう。勝山さん曰く、新種記載は金メダル、日本新産が銀メダル。勝山さんもハコネイトスゲを新種記載したことで、いよいよスゲの世界にのめりこんでしまったようです。また、スゲの会という集まりができるくらいスゲファンがいるのです。まだまだ私たちが知らない生物がうんといふことを感じるとともに、名もない生き物たちを認めていく仕事に期待が生まれます。勝山さんの講演からそんなことを感じました。今回の講演会では、流行のサイエンスカフェスタイルの一つとして参加者のみなさんにお茶を用意しました。気軽にスゲの話を楽しむ材料の一つになったことでしょう。

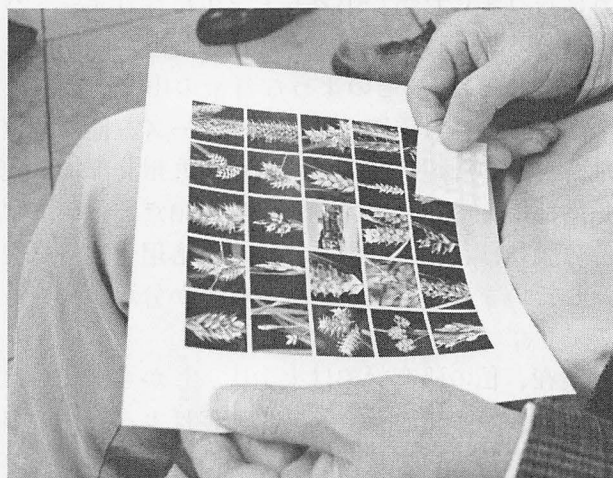
勝山さんの話題提供につづいて、会場をレストランに移しての交流会が行われました。講演を聴くだけでなく、スゲの話題で交流する時間です。秋真っ盛り、この季節恒例となった箱根からのキノコ汁、そしてスゲを模した手作り揚げ菓子も登場。さらには、勝山さんお手製の“スゲビンゴ”が会場を沸かしてくれました。5×5マスにスゲの小穂の写真が配置されたビンゴシートを片手に、プロジェクターで順に映し出されるスゲを見つけるビンゴ。似通ったスゲの小穂をきちんと見分けるための仕掛けです。早々にビンゴとなった方々のシートを勝山さんがチェックしてみると、意外に間違いがありました。それだけスゲの区別が難しいということがわかります。多数の参加があったスゲの会のみなさんも“スゲビンゴ”が受け、これからの集いでは恒例にしようとも。

話題提供をしていただいた勝山さん、参加者の

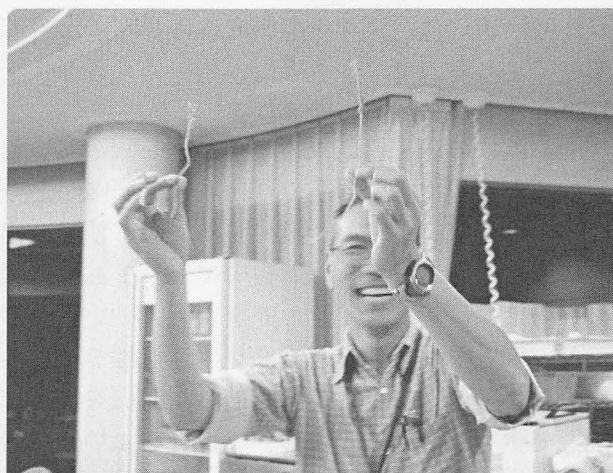
みなさん、準備担当の友の会のみなさん、おつかれさまでした。
(関口康弘)



いっぱいになった第一部の講演



スゲビンゴシート



手作りスゲ菓子を紹介する演者

「子ども自然科学ひろば

水餓鬼を育てる！ Part 5」

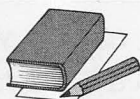
8月23日に予定していましたが、雨のために中止となりました。

「早川水系の源を探る Part12

須雲川上流の自然観察会」

10月11日に予定していましたが、荒天のために中止となりました。

わたしの選ぶ“この一冊”



「鉱物採集の旅」 東海地方をたずねて

加藤昭・松原聡・野村松光著 築地書館(1979年発行)

学芸員 笠間友博

絶版となっている本で申し訳ありませんが、思いつく限り本なので紹介いたします。鉱物をはじめ岩石や化石には小さい頃から興味があり、いろいろと出歩くことが好きでした。大きくなるにつれ、次第に遠方にお目当てのものを求めて出かけるようになりましたが、中でも大学生になりオートバイに乗るようになってからは行動範囲が画期的に広がりました。そのような背景の中で出会ったのが、この本（正確にはこのシリーズ、他に関東地方とその周辺・四国瀬戸内編・九州北部編・九州南部編）でした。大学1年生の頃だと思います。その頃私は、地学は趣味と決め、応用化学科に在籍していました。人生はどうなるか分からないものです。

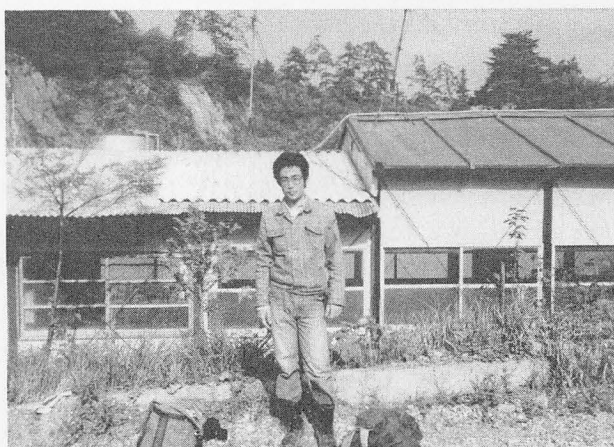
現在、私の研究対象は火山灰、しかも風化した試料が多いので、もうハンマーはほとんど使わなくなっていました。でも当時はもっぱらハンマーで、6本の異なるハンマーを持っていて使い分けていました。バイクの側面には、両手用の大型ハンマーも固定できる専用の袋を、丈夫なキャンバス地で作製して付けました。

別に鉱物のみを追い求めて、各地を回っていた訳ではなく、地層（岩石）や化石にも興味があり、荷物にならない程度の釣道具をバイクに積んで出かけることもありました。自分にとって鉱物採集の魅力は、コレクションの充実より、硬い石をどんどん割って美しい結晶を発見する過程そのものにありました。今でも、鎌を使って露頭を一心に削ってテフラ層の一番美しい（保存のよい）部分を探し出す作業はこれに似ていて、自分の好きな作業です。

いろいろと現地を回っていると、中途半端な自分とは違う、本当の鉱物マニアに出会うこともありました。今でもよく覚えているのは、本書の静岡県河津鉱山で出会ったK.A.さんです。彼は大阪から1週間の滞在計画でやって来た、当時同じ年頃（20才過ぎぐらい）の若者でした。私が感心したのは、鉱物の知識もさることながら、1週間の滞在期間中に1個見つける鉱物から、3日で1個見つける鉱物、半日で1個見つける鉱物・・・

と、細かく収集鉱物のリストを作っていたことでした。私もつられて彼の滞在期間中に再度現地に出かけ、テルルという元素を含む鉱物群を教えてくださいながら一緒に採集しました。

現地の鉱山会社の人に親切にいただいたこともありました。本書の岐阜県春日村のドロマイト鉱山（S工業）では、電動トロッコで鉱山の中に入れていただき、坑道内にある小屋でお弁当を食べながら鉱物を採集させていただきました。いつもは、草木に覆われたズリ山の中から鉱物を探すことが多いのですが、坑内にある鉱物はとても新鮮で美しいものばかりでした。中でも純白の羽毛のような珪灰石の塊は圧巻でした。鉱物採集の最中に手を洗う必要性を感じたのは、この時が最初で、もう最後かもしれません。現場の人は出稼ぎの人が多かったのですが、親切にいろいろと採掘している鉱物について説明をしてくれました。ドロマイトがガラス材料に使用されていること自体、それまで知らなかったのですが、ドロマイトの役割についてお米を例にして、ドロマイトをガラスに入れると、「うるち米」が「もち米」になるように粘りが出てきて加工が容易になるという説明は、わかりやすくとても印象的でした。その後、私は高校の地学教員になったのですが、このような一度聞いたら忘れられないような説明をしようと心がけました。でも、同窓会では「何を言っているのか分からなかった。まったく理解できなかった。」というような話題で盛り上がってしまい、あまり反応は返ってこないようです。



上記ドロマイト鉱山の翌日に立ち寄った美濃赤坂の石灰岩採石場、Y石灰事務所前にて(1983年5月撮影)。

ここでも親切にいただき、自分では採集できなかったペレロフォン（大型巻貝）の化石をお土産に頂きました。

私の応援メッセージ!

「妄想力」と「実現力」

大阪市立自然史博物館学芸員 佐久間大輔

博物館に逆風が吹くと言われて久しい。ヨサンサクゲン、テイインフホジュウ、セイドカイカク。ニュースを見ても暗澹たる気持ちになるような事件か、それがなければ社会に向けた怒りのオーラがつぶてのように飛び交うばかり。社会の状況を見れば見るほど、博物館の将来は暗い、と洗脳されているような気になってくる。21世紀初頭、博物館はじっと息を潜めて地道なことをやるしかないのだろうか。

現状は状況として知っておくことは大事。でも、今の社会状況や社会制度が絶対唯一「正しい」というものではないし、いずれ変わるだろうものもたくさんある。「今世の中がこんな何だから博物館はこうすべきだ」、という輩には「まあ、それはそうなんだけれども、」と私はちょっと身構えてしまう。

未来の博物館のことを考える際に、あまりごさかしく現状に惑わされるのはよくないのではないか、と思っている。どんな博物館が未来に必要だと思う? どんなだったらみんなが楽しい? 何より、あなたは何をやりたい? そこから出発したい。わたしたち、大阪の自然史博物館でやってることはそんな妄想ともいえるたくさんの思いつきの種の中から育ってきたものばかりだ。そしてその積み重ねが未来の博物館像をつくと信じている。

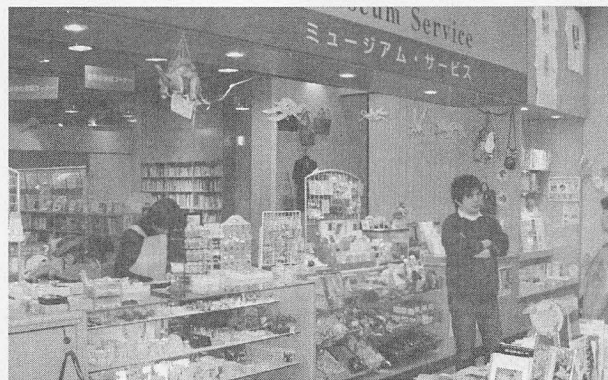
大学出版会ってあるけど博物館こそ、本に書きたいような話を山ほど抱えている、博物館出版局をつくりたいなあ。学芸員が市民に教えるだけではなくて、友の会のアマチュアの力も行事や特別展にもっと活かしたいなあ。専門家が語る講演と、幼児教育のプロが語る「おはなし」ってどちらも博物館には必要だよ。夏の夕暮れの博物館前のひろば、ああこのシチュエーションでビールが飲みたい!。古い地図で見るとここはドロ田んぼだよ、なら「ビオトープ」をつくるんならドロ田んぼであるべきだ。博物館で保育園や塾、フリースクールなんか経営できないかな。博物館が持っている10万冊の文献を有料図書館として公開できないのかな。あそこの自然館ロケーションは良いのにもったいないよね、何とかできないかなあ。博物館で取れる資格が、実質のない学芸員資格だ

けってのはどうなんかね。旭山動物園の生態展示ってあるけど、博物館で講演している学芸員でなくて、研究している姿を見せたいね。博物館学芸員同士の交流が大分積極的になってきたみたい、じゃあ次は友の会同士の交流もやりたいね。

こんな話は「そうはいっても予算がね・・・」のひと言で片付けられかねない話だ。そもそも5カ年計画や10カ年計画なんかにはたぶん出てこないだろう。だがこれらの「妄想の種」達は実際館内のどっかで検討され、半分くらいは実現に踏み出しているものたちだ。ちょっとした雑談、飲み会の本気ともつかない会話、おとそ気分であてる計画、そうしたものが何人かの会話の中でだんだん大きくなっていくのだ。面白い博物館のために「妄想力」は必須なのだ。

ただ、妄想の種に芽を出させ、しっかりと育てるためにはビジネスプランなんてものも必要。どこから資金を得て、その成果がどうなるのか。人材は足りているのか、今足りていなければ誰にいくらで働いてもらえるのか。無理なく続けていけるのか。うまくいかないときはどこで撤退する? 逆にどうやってのばしていく? 平たく言えばビジネス感覚だ。役所としての博物館に、このあたりの人材を期待するのは酷かも知れない。大阪の場合には大阪自然史センターという友の会が発展したNPO法人がこのあたりのことを旨くこなしている。

実行力がシステムになっていないと、情熱が切れたとき、活動は自転車のようにパタンと倒れてしまう。倒れて良い活動もあるけど、博物館本体が倒れるわけにはいかない。友の会も、そう簡単に倒れて良いわけがない。だからネタが芽を出すためには時を待ち、ネタの成熟を待つための休眠期間が必要。でも、いつでも伸び出せるよう、私達は妄想の種をたくさん準備しておくのである。



友の会が母体の大阪自然史センターが運営するミュージアムショップとその協力者の筆者

博物館 NOW

松島義章名誉館員が 日本第四紀学会賞を受賞

生命の星・地球博物館の松島義章名誉館員が、2008年8月23日（土）東京大学小柴ホールにおいて開催された日本第四紀学会において学会賞を受賞しました。「完新世における貝類群集解析に基づく日本列島及び周辺海域を中心とした海水準変動と古環境変化に関する一連の研究」が高く評価されたものです。松島さんは、神奈川県太平洋岸の沖積層から異なる6種類の貝類遺骸群集を見出し、それらが縄文時代の海進に伴う内湾環境をあらわしていることを明らかにし、典型的な例が大船付近に発達した古大船湾であることを指摘しました。この地学現象が、関東地方一帯の沿岸沖積層に共通して残されており、さらに日本列島全体にわたっても記録されていることを実証しました。このことは、第四紀の地質学や古生物学だけでなく、考古学にも関連して縄文時代の文化や環境復元などの研究に大きく貢献することになりました。また、博物館における展示普及活動や研究を通じた社会教育活動にも力を注ぎ、第四紀学を広く認知させることに努力したことも評価されています。

この学会の折に、神奈川県立生命の星・地球博物館も他の博物館とともに、功労賞を受賞いたしました。日本第四紀学会が50周年を迎えることを記念して、自然史系の博物館が日本第四紀学会の活動を紹介しながら、第四紀という時代にどんなことがあったのかを、展示などを通して広く広報したことを評価してくれたものです。当館では、2007年7月から11月に他館やボランティアの協力を得て、特別展「ナウマンゾウがいた！～温暖期の神奈川～」を開催しました。藤沢市渡内天岳院下で発掘されたナウマンゾウ化石を中心に、第四紀でも地球規模で著しく温暖化した13万～12万年前頃に、神奈川県の低地が海で広くおおわれたようすを紹介したものです。博物館としては、今後も学会と連携しながら学術研究の進歩を伝えていきたいと考えていますので、これからも友の会の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。（斎藤靖二館長）

<情報クリップ>



会員数 552名 10月31日現在
(正会員 549名、賛助会員 3名)

●友の会運営アンケート結果について

『2008年度以降の友の会運営に反映させるためのアンケート』にご協力いただき有難うございます。

以下の結果のほか、多くのご意見やご要望を頂きました。役員会で検討し、今後の運営に活かしてまいりますので引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

回収率 27%				
	満足	普通	不満	回答なし
① 友の会通信について	73%	24%	1%	2%
② 講座(行事)の内容について	55%	38%	3%	4%
③ 会員特典について	43%	53%	2%	1%
④ 友の会全体の運営について	58%	36%	0%	6%

●ミュージズ・フェスタ2009で『さかなクン』講演

来年3月14日・15日に開催する「ミュージズ・フェスタ2009」で「さかなクンお魚講座 in 生命の星・地球博」を14日の14時から行います。申し込み方法など詳細については、今後、博物館ホームページに掲載される情報を注意してご覧ください。

「ミュージズ・フェスタ2009」では他にもミニ火山作りや顕微鏡観察、箱根細工に挑戦する「子ども自然科学ひろば」や、ミニコンサート、野外観察会など大人も子どもも楽しめる催しをたくさん用意しています。お気軽にご参加ください。

行事案内

◆早春の房総地学巡検

房総半島の富津市南部から勝浦にかけてほぼ直線状に露出する「黒滝不整合」とその前後の地層にみられる堆積構造、鴨川付近の嶺岡帯岩石、および白浜、館山付近の房総南部の各種付加体、シロウリガイ産状等を1泊2日で観察します。また現地巡検に先立って、巡検地の観察内容等を予め習得して頂くための事前勉強会を実施します。

講師 蛭子貞二(友の会)・石浜佐栄子学芸員

(1) 事前勉強会：堆積実験とプレゼンテーション

日時 '09年1月24日(土) 10:00～15:00
(当初予定日の1月31日(土)を変更しています)

場所 博物館実習実験室

(2) 房総半島巡検 《全行程貸切りバス利用》

日程 2月7日(土)・2日8日(日) 1泊2日

1日目：君津駅(貸切りバス乗車)－市宿－養老溪谷－勝浦－鴨川(泊)

2日目：江見－白浜－伊戸－西川名－館山・赤山地下壕－浜金谷－君津駅

集合場所 JR「君津駅」南口 ロータリー

集合時間 9:30

解散場所・時間

フェリー利用者・・・浜金谷 15:00

JR利用者・・・君津駅 15:30

対象 大人／20名(抽選)

参加費 13,000円／人

(参加人数により多少の変更も有り得る)

締切り 1月13日(火) 必着

その他 雨天決行 *チラシ有り

連絡先 中村(良) 0438-23-4007

◆84回サロン・ド・小田原

演題 「アイスランドの火山」

演者 萬年 一剛(神奈川県温泉地学研究所)

日時 1月24日(土) 17:30～

交流会 18:30～

場所 博物館講義室・レストランフォーレ

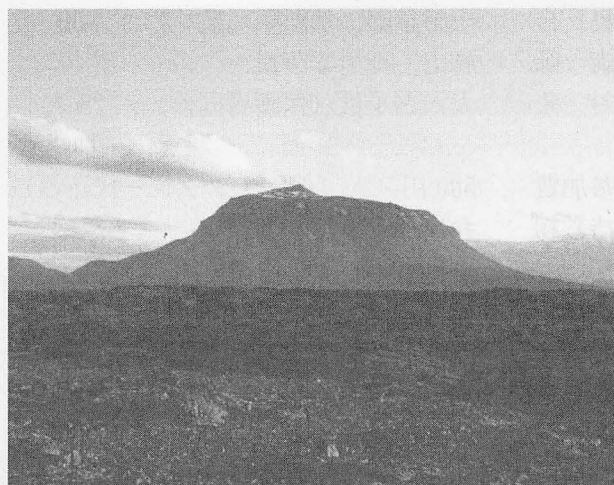
参加 当日受付

講演のみの参加は無料。

交流会参加費は1000円／人

連絡先 友の会事務局

アイスランドは日本の北海道と四国を合わせた程度の大きさの島国ですが、全島が火山活動で形成された、いわば巨大な火山島です。火山学者にとっては聖地とも言えるこの国で、2008年夏に IAVCEI (国際火山学・地球内部化学協会) が開催されました。私は、この学会と巡検に参加したほか、期間中にいくつかの見所を回ってきました。アイスランドは夏でも寒い上、曇りか雨の日がほとんどなのが普通ですが、今年は非常に晴天に恵まれたたくさんのきれいな写真を撮ることが出来ました。今回の「サロン・ド・小田原」では、アイスランドの火山と風景をスライドショーで紹介します。



アイスランドを代表する火山、ヘルズブレイズ山の勇姿

◆地図を楽しもう！

「地図が読める」とはどういうことでしょうか。地図からさまざまな情報を獲得できるということです。今回の講座では、地図に載っている情報を知るための「コツ」を紹介します。あなたも、ちょっとした地図の達人になってみませんか。

日 時 2月1日(日) 10:00～15:00
場 所 博物館実習実験室
講 師 新井田 秀一学芸員
対 象 大人と子供(保護者同伴で) / 20人
参加費 400円(地形図代含む)
締切り 1月17日(土) 必着
連絡先 関口

◆植物観察会 「田園地帯の春を楽しむ」

小さな盆地に広がる穏やかな田園地帯の柳川で春を探します。

日 時 3月8日(日) 10:00～15:00
(雨天中止)
場 所 秦野市柳川
集 合 小田急線 渋沢駅 改札口9:00
講 師 勝山 輝男学芸員
対 象 大人と子供(保護者同伴) / 25人
(抽選)
参加費 500円/人(保険・タクシー代込み)
持ち物 弁当、ルーペなど
締切り 1月31日(土) 必着
連絡先 赤堀

●第13回総会のお知らせ

開催日 2009年4月5日(日)

当日は沢山の会員の皆様に参加していただけるイベントを企画中です。

詳細につきましては来年1月末にご案内しますのでご期待ください！



■参加申し込み

往復はがきに必要事項を記入して、友の会事務局までお送りください。ファックスや電子メールでは受け付けませんので、ご注意ください。

行事名/開催日/参加者全員の氏名・年令(学年) / 会員番号/代表者の住所・電話番号/指定事項
ご不明な点は、友の会事務局へお問い合わせください。

■受付

返信はがきが開催日の1週間前ごろにお手元に届きます。当日ご持参ください。

■あて先

神奈川県立生命の星・地球博物館友の会事務局
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

注意！

★参加費は1名分の金額で、内訳は資料代、傷害保険料です。それ以外のものは特記事項に記載があります。バスなど予約が必要な場合、参加者個々に材料を購入する場合などの講座参加確定後のキャンセルは、代わりの方をご紹介いただくか、参加費を負担していただく場合があります。

★オープンの行事は会員外の方も参加できます。

★小学生以下の参加は保護者同伴が原則です。

★チラシの発行されない行事もありますので、直接<連絡先>へお問い合わせください。

★持ち物など詳細は返信はがきに記載されます。



友の会通信63号は、2009年3月15日発行予定です。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会

Vol.12, No.3, 通巻62号 2008.12.15 発行

編集：友の会広報部

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846